

# フレーベルの「庭造り」(Gartenpflege)から見る 幼児期における栽培の意味

青木美智子

## はじめに

本論の課題は、幼児期における栽培活動の意味を、フレーベルの「庭造り」(Gartenpflege)概念から検討することにある。フレーベルは1840年にドイツ東部に幼児を集めて教育するための施設“Kindergarten”(幼稚園)を設立し、「遊び」を中心においた教育についての考察を発表、その実践を展開した<sup>(1)</sup>。

フレーベルによれば、神は万物を創造し、人間の内にも「創造する」という本質を与えた。したがって人間の教育は、何かを作り出したいとする衝動(形成衝動: Beschäftigungstrieb)を大切に守りながら、育てていくことを使命とする。ここから、人はそれぞれの時期にふさわしい方法で、形成衝動を伸び伸びと発揮していくべき存在であるとされたのである<sup>(2)</sup>。

幼稚園創設の二年前に発表された「創造的な活動衝動を育む学園の計画」<sup>(3)</sup>では、幼児教育の骨子が次のように示されている。

子どもの最も早期の活動、子どもの最初の行動、人間や子どもの中に早くから現れる形成衝動や自由な活動および自己活動の衝動を理解し、家庭における子どもの最も早期の作業や、また自己創造や自己観察や自己吟味によって自分自身を教育したり教授したりしようとする衝動をしっかりと捉え、これを大事に育むべきである。<sup>(4)</sup>

フレーベルは乳幼児の欲求や活動に、周囲の大人たちが十分に応じることができるよう、「遊具・作業具、すなわち教育の手段を提供すること」<sup>(5)</sup>を宣言する。教育的な意図を持った働きかけが、対象物を仲立ちにして行われるというコンセプトを示したのである。これが幼稚園における幼児教育の一つ『恩物遊び』(Spielgabe)である。

「恩物」は「遊び」“Spiel”と「賜」の意であるところの“Gabe”を結びつけたフレーベルの造語である。いくつかの遊具で一組となり、それぞれに第一、第二と番号が振られ、全体で大きな玩具の体系を成している。番号が上がるにつれ玩具は複雑になり、微細な手指の動きを要求する。同時に、対象となる子どもも大きくなる。およそ児童期になると、『作業(のための)道具』(Beschäftigungsmittel)と呼ばれる、より複雑な構成のものに繰り上がる。この作業具は

恩物の体系の延長にあたる。

H. ハイランド<sup>(6)</sup>によれば、幼稚園における幼児教育は恩物の他に『運動遊び』(Bewegungsspiele)と『庭造り』(Gartenpflege)の三要素から構成されている<sup>(7)</sup>。

「運動遊び」は子どもの活動への欲求をかなえるものである。特徴は子どもたちが集団で、ほとんどの場合歌いながら、輪になって遊ぶことにある<sup>(8)</sup>。こんにちの保育におけるごっこ遊びに類するものや、ボールを用いたりズミカルな運動も含まれる<sup>(9)</sup>。難易度が設定されており、年齢が上がるにつれて素早さや正確さが要求される。

「庭造り」についてフレーベルは著『人間の教育』(1826年)の中で幼児期の後半から児童期へかけて「きわめて重要」な活動として位置づけている。

自分自身の庭を造ること、とりわけ何らかの収穫を上げるために庭造りに取り組むことは、この年頃ではきわめて重要なことである。[ME.66=145]<sup>(10)</sup>

幼児期の恩物遊びから始まり、作業具による形作ることへの作業を通して養われた「何かを作ろうとする衝動」(Beschäftigungstrieb)が、そして運動遊びを通じて培われた「活動することへの衝動」(Tätigkeitstrieb)が、いよいよ「庭造り」へと結びつき、展開する。

フレーベルにとって一人一人の庭はとりわけ重要だった。なぜならそこで子どもは自分の仕事の「成果」(„Früchte“)を目の当たりにするからだ。<sup>(11)</sup>

そもそも“Kindergarten”(幼稚園)はKinder「子どもたち」とGarten「庭」から成る造語である。したがって庭造りは、「子どもたちの庭」(Kinder-Garten)におけるそれぞれの子どもによる「庭造り」である。子どもは子どもの庭で植物を育て、大人は幼稚園において子どもたちを育てるのである。

このようにフレーベルは植物を育てることによってのみ子どもの内に育てられるものがあるとし、栽培を幼稚園教育の原理の一つに据えた。つまり、栽培において幼稚園教育が成立するのであり、他の諸活動には置き換えのできないものとみなしたのである。

以下第一章ではフレーベル思想を「古典」として読み解く手続きとして、先行するフレーベル研究と本論の関係を、第二章では「庭造り」を、第三章ではフレーベル思想における栽培の意味を検討する。

## 第1章 フレーベルを古典として読むということ

フレーベルを保育の「古典」として読み、ここから現代の問題を解く鍵を見いだそうとする本論の試みについて、まずは先行研究との関係から立場を明らかにする必要があるだろう。フ

レーベル研究は19世紀後半からこんにちまで膨大な量を誇るが、ここではロマン主義的解釈をめぐる議論に焦点を絞り、その概要から本論の立場を示すこととする。

## 第1節 「無垢なる子ども」を守り育てる教育学

H. ノール(1879-1960)は1922年、プロイセンで初めて設置された教育学講座の教授となり、ドイツのアカデミズムにおいて教育学が自立した地位を占めるのに貢献した教育学研究者である。また、ノール学派と呼ばれる多くの優秀な後進を育て、彼らの活躍を通じてドイツの教育界に大きな影響を及ぼした。その理論は、W. デイルタイの「生の哲学」に基礎を置く「教育現実の解釈学」であり、教育学は一方で客観的なもの(文化)を教育に対する要求を受け入れ、他方では、それが主観(子ども)の成長にとってどのような意味があるのかという両極の構造を有するとした<sup>(12)</sup>。

20世紀初頭、このような教育学全体の潮流の中で、フレーベルの思想研究もまたノール学派によって道筋がつけられた。とりわけO.F. ボルノウが『ロマン主義の教育学』(1952)の中心にフレーベルを位置づけたことによって、ロマン主義者としてのフレーベル像が作られた。

ロマン主義は18世紀末から19世紀前半にかけてヨーロッパ各地で展開した思潮であり、これまで重きを置かれてきた理性や合理性に対抗し、個人の自由や感性および想像力を信奉し、その表現を追求した。社会体制への反抗が強いことから自然への逃避を謳い、敢えて合理性にそぐわない神秘的なものへの憧憬を主題とした。

理性に信頼を置く時代においては、子どもたちは成熟した大人に対して未熟な存在であり、将来のために教育される必要がある。しかし社会全体が不満と不振に満ちている時、子どもの未熟さは社会的文化的に穢されていない、無垢を表す象徴となる。「子ども時代はたった一つの、我々が文明化された人間性の中でいまでも出会うことができる完全なる自然である」(シラー)<sup>(13)</sup>、「子どもは美しい人間性そのものである」(ティーク)<sup>(14)</sup>。この時代精神を、M.S. バーダーは「愚かな大人、優れた子ども」と言い表している<sup>(15)</sup>。しかし教育は理性の時代ほど簡単ではない。第一に、大人が世俗にまみれ、もはや手の打ちようもない現実を生きている。一方子どもたちは未だ穢れをしれず、神聖な領域に住んでいる。したがって大人が救われるためには、子どもという聖なる導き手が必要である。「子どもによって、世俗的なものと天国的なものがもう一度結びつくことができるようになる」<sup>(16)</sup>。このような子どもをめぐる観念を土台にフレーベルを解釈したH. ウルリヒは、フレーベルが目指す「全面的な生の合一」とは、「大人は子どもとの遊びや会話によって、内なる子どもへと回帰し、神聖さを取り戻す」<sup>(17)</sup>ことで達成されるとしている。

なるほどフレーベルが幼児の教育を提唱したこと、子どもと両親あるいは保育者とともに遊ぶことを提案したのは、子どものためでもあったが、同時にまた、かかわる大人が清らかさに触れるためでもあった、と確かに解釈されうる。

## 第2節 「真の」フレーベル

上のような解釈の枠組みが立てられ、旧西ドイツではほとんど20世紀を通じて支持されてきたことの背景には、フレーベルの一次資料がドイツ各地に点在していたこと、とりわけ旧東ドイツ地域に数多く残されていたことが大きい<sup>(18)</sup>。東西ドイツ統一後、遺稿の収集と分析は飛躍的に進み、書かれた時代や場所、フレーベルが具体的に想定した読み手が次第に明らかにされていった。この研究の第一人者H.ハイランドは、これまで主流とされてきたロマン主義的解釈を無効とし、テキストが書かれた文脈と著者の真意に即して解釈の道筋を立て、「真の」フレーベル "Der authentische Fröbel"<sup>(19)</sup>を主張した。

ハイランドによれば、フレーベルがこれまで教育の対象とされなかった幼児期にまで働きかけようとしたのは、この時期が「人間の教育」<sup>(20)</sup>の基礎を作る重要な時期にあるとみなしたからであり、無垢な幼児を保護しようとしたからではない。また、大人が子どもの遊びにかかわるのは、子どもの活動への意図的な働きかけであり、「子どもの自発性と教育的な働きかけとを分かちがたく結びつける」ためである<sup>(21)</sup>。結論から言うと、フレーベルは、乳児が腕や脚をばたつかせたり、じっとみつめたりする諸活動に意識的に働きかけよ、と呼びかけたのである。この働きかけのために毛糸の玉を揺らしたり、積み木で左右対称の形を作ったりすることが、功を奏するというのである。これが有名な「恩物遊び」である。

こうしてフレーベルの幼児教育の思想から、神聖な子どもとの自由な遊びという解釈は退けられ、子どもとの遊びは「大人による意味の示唆」であると結論づけられた<sup>(22)</sup>。

## 第3節 本論の立場

西洋政治思想史の小野紀明は、自らの仕事を次のように述べている<sup>(23)</sup>。「古典を読むことは、わたしにとって日常的な営みです。……研究者であるわたしは、現在の人間として過去のテキストと学問的に対峙しているのです。」ここから小野は古典には二つの読みがあるとし、両者の違いに言及する。

一つは、個人が自己の問題意識ないし社会問題への問いを求めて、古典を手に取り自由に読むことである。「その読み方は完全に自由であり、もっとはっきり言えば自分勝手であり、著者の意図、真意などは無視してもかまいません。」これに対して学問的な読みでは、「著者が具体的な読み手として誰を想定しているかはきわめて重要な問題であり、その点を明確にするためにはそれが書かれた時代状況を明らかにすることが決定的に重要です。この点を無視して読者が勝手にテキストを選んで、勝手にそこに自分の問題を読み込んでいくことは許されないので。」

このことをフレーベル研究に照らしてみると、後者「学問的な読み」はハイランドによって成立し、「真のフレーベル」を実証的に明らかにしたといえる。では、ハイランドだけが価値ある研究なのだろうか。

フレーベルのコンセプトを継承した幼稚園教育に関する伝播とその展開を明らかにした受容

史の成果によれば<sup>(24)</sup>、時代、地域、文化そして言語を超えて、幼児期の教育を担う施設として Kindergarten が広く受け入れられていること、そして幼児期の教育は「遊び」を基礎に置くという着想が、地域民族に固有の教育観を付加されながら、さまざまに展開しているのである。ここで「真のフレーベル」より特に重要に思われてくるのは、ある時代や地域、社会の中で、フレーベルがどのように解釈されているのかならびにそのような解釈を導いた理由の方である。

先のロマン主義が台頭した時代のように、大人が余暇を楽しむ暇もないほどあくせく働かざるを得ない場合、子ども時代の遊びという活動は、生産性とはほど遠いがゆえに憧れの対象となり、人間本来の活動のように見え、次の世代にはもっとゆとりある社会の構築を願うかもしれない。このような時代であれば、幼児教育は自由な自発的な活動を中心に据えることになるかもしれない。またその逆もある。幼児期から良き労働者の育成という文脈から「遊び」が将来の労働活動の延長として解釈された時代もあった<sup>(25)</sup>。フレーベルの思想それ自体が問題というよりも、いかに捉えているかに着目することによって、社会における幼児教育を検討することが可能となる。

小野は学術的な古典の読みに対して個人的かつ自由な読みについて次のように述べている。

それでもなんらかの示唆を与えて、わたしたちを満足させてくれるのが、歴史のなかで繰り返しまれ続けてきた古典の古典たるゆえんであり、だからこそわたしたちは昔から古典に親しみ、古典を紐解いてきたのです。これこそが、古典の読み方として一番オーソドックスなのかもしれません。<sup>(26)</sup>

本論では、保育が制度上ならびに内容上大きく変わろうとしている現代にあって、フレーベルの幼稚園教育学を支えるいくつかの要素に着目することを通して、幼児の育ちに欠けてはならない事象について検討するものである。

## 第2章 幼稚園における子どもたちの庭

フレーベルの思想を前、後期に分けるとすると、前期の教育全体に関する考察は『人間の教育』(1826年)に、後期は幼稚園における諸活動の理念と方法を幼稚園の定期刊行物(1850年~52年)において明らかにした<sup>(27)</sup>。庭造りに関しては「フリードリヒ・フレーベルの週刊誌」(1850年)に「幼稚園における子どもたちの庭」<sup>(28)</sup>というタイトルで掲載されている。この文章はフレーベルが没するわずか二年前のものであり、『人間の教育』で示された教育の原理が幼稚園教育の実践を通じて深められ整理されている。

この文章は人間と自然の関係から始まり、自然と子ども、そして幼稚園における子どもたちの「庭造り」に言及する。中盤、栽培活動の細目が付され、全体図(図1、2を参照)が添えら

れ結びとなる。

## 第1節 子どもたちの「庭造り」

冒頭では「自然を神の直接の行為の啓示として」考察することの重要性を説き、そのために人間が自然を「心からよく知り、心から融合すること」が「教育の確固たる基盤」であると述べられる。

この重要性はしかし、自然の生成と発展の中に示され、特に自然の生成と人間の成長発達と比較して観察する場合に、したがってまず第一に自分自身の成長発達と比較して観察する場合に示される。〔GK 174=544〕

この「比較的な観察は……まだもっぱら成長し自己発展しつつある人間、すなわち子どもや青少年にとってとりわけ重要である」。この前提から、幼稚園教育における栽培活動の本質が示される。

こうして十分に全面的な教育、したがって幼稚園の本質は、必然的に、そのための機会が子どもに与えられることを要求する。幼稚園という言葉は……おのずとその方法と手段を語っている。すなわち「子どもたちの庭において」(im Garten der Kinder)である。したがって幼稚園、幼稚園の完全な理念、もしくは明瞭に表現された幼稚園の思想は、必然的にひとつの庭を要求し、さらにこの庭の中に、子どもたちのためのもろもろの庭を要求する。〔Ibid.〕

「幼稚園」(Kinder-Garten: 子どもの庭)は大人が子どもたちのために作った庭であるが、その庭の中にまるで入れ子のように、子どもが自分たちで作るための「子どもたちの庭」(Garten der Kinder)が必要であるという。

## 第2節 庭造りの全体像

幼稚園における子どもたちの庭造りについて、フレーベルは八項目に渡り細目を示しかつ具体的な図を添えている。その概要は次の通りである。ここにすべてを引用することはあまりにも煩雑であるため、項目ごとに要点のみ引用するにとどめる。

1. 子どもたちのための庭の全空間は、長方形の形が最も適当である。
2. さてこの全空間は二つの部分に分けられなければならない。つまり共用の部分と個々の(すなわち子どもたちのための)<sup>(29)</sup>部分とに分けられなければならない。
3. 共同の部分は取り囲み、いわば保護するものであり、子どものための部分は取り囲まれ、

いわば保護されるものである。

4. 子どもたちはこの庭によって植物界の全体へ導かれることはできない。むしろ人間の必要とする部分のみへ、つまり畑(Feld)の作物と狭い意味での庭(Garten)の作物へと導かれる。こうして共同の土地は、庭の土地と畑の土地とに分けられる。<sup>(30)</sup>
5. さらに庭(Garten)の土地は、花園(Blumen-)と菜園(Gemüsegarten)に分ける。
6. 耕地(Ackerland)は油性植物・穀物・さやまめ類・球根類・かぶら類および青菜類のための土地に分け、最後に飼料用草木のための土地に分ける。
7. ……土地または所有地が十分にある場合には、それぞれの子どもに面積四平方フィート<sup>(31)</sup>の正方形の土地を与える。土地が少ない場合には、二人の子どもに六平方フィートの長方形の土地を共同で与える。しかし子どもの数が多すぎて土地が少ない場合には、二人の子どもが四平方フィートの土地でやっていかなければならない。
8. 全体を分割し、再び結びつける道は、本道かそれとも個々の小花壇の間道かである。間道は一フィートの幅で良いが、もし本道の幅を二、五フィートにできるならば、そうした方がよい。そうすれば、二人の子どもが本道を一緒に並んで歩くことができる。

### 第3節 〈わたしの土地〉と〈みんなの土地〉

以上が幼稚園における土地の使用と区分に関する項目であるが、第8項目には引き続き留意する事項として以下の通り述べられている。そしてこの中に、幼稚園における栽培の第2の意味が語られている。それは、個人に割り当てられた部分、いわば〈わたしの土地〉と共同で使用する部分、いわば〈みんなの土地〉との明確な区別によって現れる。

〈わたしの土地〉すなわち個人に割り当てられた区画には、名前を書いた板が立てられる。そして何を植えるか、どのように育てるか、維持管理をどのようにしていくか、そのすべては所有者であるそれぞれの子どもに任される。

当然のことながら子どもは栽培の方法を知らないので、植物は思うように育たない。フレーベルはしかしこの失敗を期待している。「子どもたちは、植物は細心にして合法的に取り扱わなければならないということを、自分の不法な取り扱いから経験する」<sup>(32)</sup>からである。また割り当てられた土地が荒れ放題であったり、手入れが十分に行き届いていなければ、周囲に面目が立たないことになる。

どの子どもも、直ちに友人の花壇を見つけ出す。そしてどの子どもも自分の花壇のそばに立っている名前によって、自分がその花壇をこれまでぞんざいに取り扱ってきたか、あるいは注意深く取り扱ってきたかに応じて、正当な無言の賞賛か、あるいは正当な無言の非難かを受け取るのである。〔GK 178=549f.〕

〈わたしの土地〉は子どもが自分のやり方で試行錯誤する場であり、育てることに失敗する

こともできる。そのようにしながら、植物とのかかわりを深めていくのである。

一方、〈みんなの土地〉では、保育者が作物の名前や種子の特徴を教え導くように関わり、維持管理も「全員で共同して、あるいは何人かが一緒に交代制で」行う。

共同の土地の播種、もしくは植え付けの際に、さまざまな作物の種子を見せて比較させたり、並べたりして、共通の特徴と異なった特徴とを見つけ出させる。そうすれば子どもはさまざまな作物の名前を言ったり、その種子を識別したりできるようになる。夏と秋には、同様に種子はすべて集められ、そして冬に利用するため、春に再び植え付けいるために、前もって子どもたちが作製した紙箱の中に貯蔵する。すでに他の場所で育てられた苗をこれらの庭に直接移植される作物についても、同様にする。〔GK 177=548〕

子どもは〈わたしの土地〉と〈みんなの土地〉を行き来しながら、個別的なものと全体的なものとの関係を意識する。前節の項目3. にあるように、共同が個を取り囲み、保護し、また個は共同に取り囲まれ、保護されているのである。

子どもたちの庭を幼稚園と結合すべきだという要求の必然性は、単に今述べた高次の理由からだけではなく、さらにまた社会的・市民的な共同生活の理由からも表れてくるものである。というのは、人類の一員としての人間、すなわち子どもは、早くから個人としてまた個別なるものとしてと同様に、より大きな全体生命の一員としても認められ、取り扱われなければならないのみでなく、そのようなものとして自己自身を認識し、それを行為によって示さなければならない。〔GK 176=545〕

庭造りは植物の生成・成長・凋落を通して子どもに自らの成長や発達と重ね合わせることができる。また庭全体を個人と共同との二つに区分したことから、家庭と社会の関係、家族の一員にして社会の一員でもある自己自身についての導きともなる。

子どもがこの庭において真の家庭生活、真の市民生活の一つの像を認めるように、子どもはそれぞれの対象物において、その対象物の生成・成長・凋落を通じて、すなわち、その対象物が一個のものから発展して再び一個のものの表現に立ち返ることを通して、彼自身のよりよい理解と、より正しい把握のための彼自身の一つの像、一つの対象物を見いだすのである。〔GK 178=550〕

### 第3章 幼稚園教育学における庭造りの意味

フレーベルが教育についてどのような理想を持っていたのか、本章ではその枠組みを示し、



幼児期の教育について、特に恩物遊びとの対比から、庭造りを位置づけることとする。

## 第1節 教育について

フレーベルはもともと幼児期の教育だけを問題としていたのではなく、主著のタイトル『人間の教育』が示すように、人間の教育全体について構想していた。故郷カイルハウの小村における実験的な学校からは、運動遊びや、建築の組み立てから恩物遊びの構想を得たとも言われている<sup>(33)</sup>。また幼稚園と小学校との間に接続学校のプランも存在した<sup>(34)</sup>。

その教育思想の原理は、『人間の教育』の冒頭の一文、「すべてのもののなかに、永遠の法則が、宿り、働き、かつ支配している」に表されている。この永遠の法則なるものが、外なるもの、すなわち自然にも、内なるもの、すなわち精神にも、両者を統一するもの、すなわち生命のなかに、宿り、働き、支配しているとする。この法則の根底に神が存在しているという。

この統一者が、神である。／すべてのものは、神的なものから、神から生じ、神的なものによってのみ、神によってのみ制約される。神の中にこそ、すべてのものの唯一の根源がある。……すべてのものは、神的なものが、その中に働いていることによってのみ、初めて存在する。／このそれぞれのものの中に働いている神的なものこそ、それぞれのものの本質である。〔ME 7=12〕

人は、自分のうちにある神的なものを十分に意識し、生き生きと発揮することが本分である。しかしこの神的なものに気づくのは容易ではない。したがって教育は、自然の中にある神的なものを示すことで、自己への洞察を促そうとするのである。

人間を取り巻いている自然に内在し、自然の本質を形成し、自然の中に常に変わることなく現れている神的なもの、精神的なもの、永遠なものを、教育や教授は、人々の直観にもたらし、人々に認識させるべきであり、またそうでなければならない。〔ME 8=15〕

## 第2節 対立する同一物による媒介

人と自然は同様に神的なものを宿しているので、本質的には同一といえるが、この同一性は、対立的なものとの比較によって強く認識される。すなわち、〈比べること〉によって〈違うこと〉に気づかせ、〈違うけれども同じこと〉の気づきへと導くのである。これをフレーベルの言葉では「対立する同一」(Entgegengesätztgleichen)という。この仕組みは、とりわけ恩物遊びにおいて現れている。

恩物において子どもが気づきを得る場面として印象的に描かれているのは、立方体と球体の積み木の性質を遊びにおいて比べているとき、円柱体を示される第3恩物による。というのも、

立方体はその性質として机の上に直立するが、球は転がる。しかし円柱には両方の性質があり、立方体のように直立もするが、転がすこともできるのである。したがって一見立方体と球は対立しているかに見えているが、円柱の仲立ちによって、「対立する同一物」であることに気づくのだという。

球と立方体は、容易に直観したり洞察したりすることができ、……純粹にそして幾重にも対立している同一物であります。しかしこのような対立のために、子どもの多面的な本質および性質は、同様に容易に直観し証明できるような媒介物を要求します。そして実際、この媒介物が子どもの要求や遊びや作業に、まさに連続性を与え、それによって発展的なもの、教育的なもの陶治的なものを与えるのであります。／ごろごろころがり、容易にすべての面に動き、そして回転できる円い面の球と、もっばらいわば怠け者で直線的な面を持つ立方体との間を媒介するものは、球のように容易に転がるものであり、また立方体のようにしっかり立つものであります。それは円いものと直線的な面とを結合するところの円柱であります。<sup>(35)</sup>

ここですべての恩物について詳細に論じることはできないが、第一恩物は光と色の関係を、第二恩物は陰と光の関係を、第三恩物ではシンメトリーという美の仕組みについて等々、恩物遊びは対立する同一物の理論で貫かれている。各恩物それ自体もそのように作られているが、第一恩物の球体から始まり、立体物から平面へ、平面から線へ、線から点へという全体が、このような理論によって構想されている。

### 第3節 「恩物遊び」と「庭造り」

人と自然の本質的な一致、すなわち〈生命〉についての認識を育もうとするフレーベルの教育のモチーフは、二つの異なるもの同士を媒介する第三のものによって示されるとされる。恩物はそのために考案された玩具であり、理論の具体化に成功しているが、一方の「庭造り」では、これほど明確に対立する関係は表れて来ず、より穏やかで調和的である。これは奇妙な逆転のように思われる。というのも、自然との本質的な一致を目指すのならば、人工的に作られた玩具の体系から学ぶよりも、自然そのものと相対する方が子どもにふさわしく思われるからだ。このことについてフレーベルは次のように述べている。

もろもろの現象をもつ自然は、一面においては人間にあまりにも近く、他面においてはあまりにも遠くにあります。それですから、とくに子どものためには、ある媒介的な第三のものを必要とするわけです。……媒介的な第三のものは、何よりもまず自然の対象物でもなければ、また子どもや人間それ自身でもあり得ないものでありますから、一面から見ると、この第三のものが人間の本質を自らのうちに持っていると言うことを、いわば証明せ

んがために、必然的に人間の精神の一つの所産でなければならないからです。<sup>(36)</sup>

恩物において〈自然〉は、法則性を強調する形で、いわば教材化された形で提示されているといえよう。これに対して「庭造り」は、多様な作物や草花を栽培することから、それぞれに異なっているはある一つの法則性のもとに発芽し生育していくという「対立する同一」を示しているといえよう。また、一人であるいはみんなで作業を行い、収穫の喜びを分かち合えることも、植物栽培における特色である。

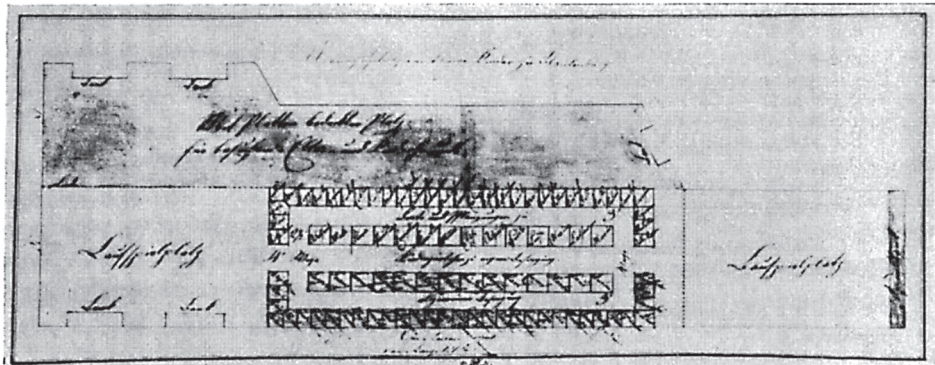
## 結びに代えて

本論ではフレーベルの「庭造り」を検討することから、幼児期における栽培の意味を考察した。第1章ではフレーベルの教育思想を古典として読み解くことの妥当性を問題とした。フレーベル思想を「真のフレーベル」として読み解く歴史的事実主義的な研究に対して、時代の幼児教育への関心から解釈を立てることとの意味の違いを明らかにした。

第2章では「幼稚園における子どもの庭」の検討を行った。庭造りには大きく二つの意味が置かれているのを確認した。第一には、幼稚園に子どもの庭を設けることで、子どもは幼稚園で保育されている自分と、その同じ自分が育てている植物との関係を重ね合わせる。様々な植物が子どもに生成・成長・凋落の循環を示すのだ。第二は、土地の所有に関わり、個別的なものや全体的なものとの関係や、家族と社会の一員であることへの認識を促すという。幼児期の後半から児童期にかけて、自分のものとみんなのものとの区別や、一人であるいはみんなで作業することの違いを、庭造りを通して体験するのである。

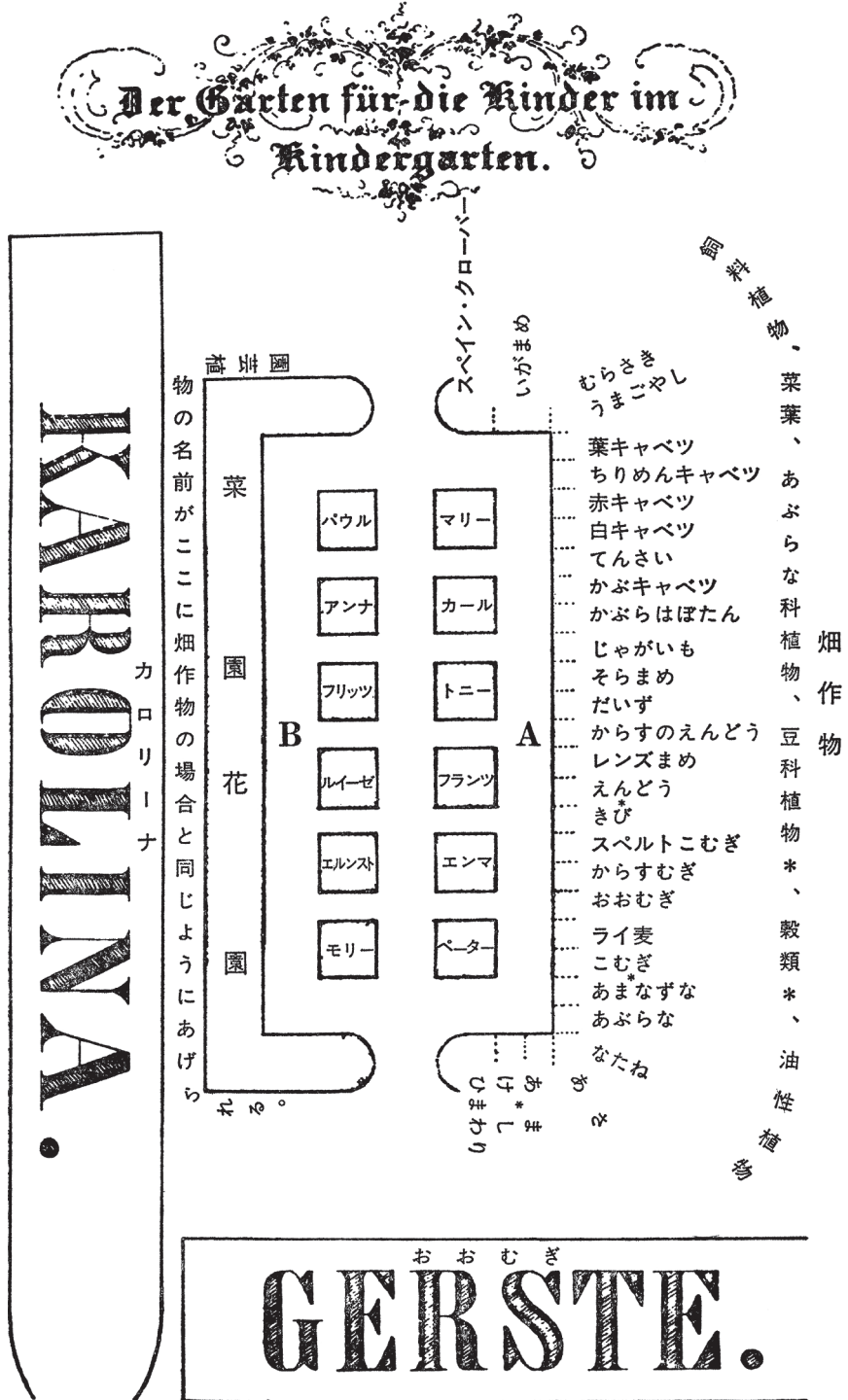
第3章ではフレーベル思想上の栽培の意味を、恩物との比較から検討した。ここで自然についての考察が、恩物における自然科学的な意味での自然と、栽培における自然そのものとの違いについて述べた。フレーベルにおける自然概念のさらなる検討は、今後の課題として残される。

図はフレーベルによる「子どもの庭」である。



【图1】 Bold. R. Knechtel, E. König, H. "Kommt, Lass uns untern Kindern leben!" Volks und Wissen. 1982. S.175

幼稚園における子どもたちのための庭



【図2】 「幼稚園における子どもたちの庭」『フーベル全集』第四巻、玉川大学出版部、1991年、551頁。

## 注

- (1) やがてこれが世界各国に広がり、日本では1876年に「幼稚園」と訳され、こんにちまで就学前教育の一翼を担っている。
- (2) これらフレーベルの基本的な理念は主著『人間の教育』前半部においてつまびらかにされている。本論では『人間の教育』について次を参照。E.Hoffmann (Hrsg.): Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften: Die Menschenerziehung. (1968). 3. Aufl. Verlag Küpper. = フレーベル『人間の教育』荒井武訳、岩波文庫、1997年。
- (3) 「創造的な活動衝動を育む学園の計画」『フレーベル全集第四巻』玉川大学出版部、1981年、31-43頁。
- (4) 同上、34頁。
- (5) 同上、36頁。
- (6) ドイツのフレーベル研究における第一人者。一次資料の収集および編纂を行い、歴史的事実としてフレーベルの教育思想や活動を意味づけた。
- (7) Heiland, H. Friedrich Wilhelm August Fröbel. Schneider Verlag. 2002. S.56.
- (8) 子どもたちが輪になって行う遊びが特徴的であり、このことは、フレーベル思想の根本にある「球体の法則」(Späregesetz)理論の反映であるともいわれている。
- (9) 詳細は「運動遊戯」『フレーベル全集第四巻』玉川大学出版部、1981年、376-461頁。
- (10) 以下引用については、[]内に原書名の省略記号、該当ページを、また「=」にて参考とした邦訳書の該当ページを示す。E.Hoffmann (Hrsg.): Friedrich Fröbel. Ausgewählte Schriften: Die Menschenerziehung. (1968). 3. Aufl. Verlag Küpper. = フレーベル『人間の教育』荒井武訳、岩波文庫、1997年。
- (11) Heiland. 2002. op.cit., S.60.
- (12) 坂越正樹「ノール」『教育思想史事典』勁草書房、2001年、554頁
- (13) Schiller, F. "Über naive und sentimentalistische Dichtung." 1795
- (14) Tiek, L. "Über die Kinderfiguren auf Raffaelschen Bildern." 1799
- (15) M.S. Baader, "Die romantische Idee des Kindes und der Kindheit." Luchterhand. 1996
- (16) Berg, Chr. "Kind/Kindheit" In: Historische Wörterbuch der Pädagogik. Beltz Verlag. 2004. S.504.
- (17) Ullrich, H. "Das Kind als schöpferlicher Ursprung" Julius Klinkhardt. 1999. S.354.
- (18) 旧東ドイツでは社会主義の文脈において解釈が行われた。詳細は Aden-Grossmann, W. "Der Kindergarten." Beltz Verlag. 2011
- (19) Heiland, H. "Der authentische Fröbel." Friedrich-Fröbel-Museum Bad Blankenburg. 2004
- (20) フレーベルの主著『人間の教育』"Die Menschenerziehung." 1826年。
- (21) Heiland, H. "Fröbel und Romantik." In: Fröbelforschung heute. Verlag Königshaus & Neumann. 2003. S. 299.
- (22) 「子ども自身の「育ちにゆだねること」(Wachsen lassen)と大人が「導くこと」(Führen)の弁証法」Heiland, 2003: 305
- (23) 小野紀明『古典を読む』岩波書店、2010年。
- (24) 湯川嘉津美『日本幼稚園成立史の研究』風間書房、2001年ほか。
- (25) Aden-Grossmann. 2011
- (26) 小野、前掲載。
- (27) 一次資料の編纂に携わったハイランドは、庭造りの記述においてフレーベルの抽象的なモチーフすなわち「球体の法則」は後退し、「国民教育のための施設」としての意義が強調されていると指摘している。Heiland, H. "Spielpädagogik Friedrich Fröbels." Beiträge zur Fröbelforschung 5. Georg Olms Verlag A G. Mörlenbach, 1998
- (28) 以下引用については、[]内に原書名の省略記号、該当ページを、また「=」にて参考とした邦訳書の該当ページを示す。Bold. R., Knechtel, E., König, H. (Hrsg.): Kommt, Lass uns Unsern Kindern Leben! Band III. Die Gären der Kinder im Kindergarten. Volk und Wissen. 1982. S.174-180. (以下 GK) =

「幼稚園における子どもたちの庭」『フレーベル全集第四巻』玉川大学出版部、1981年、543-554頁。

- (29) ()内は原文のママ。
- (30) ここで畑 Feld と庭 Garten の区別が現れる。「畑の作物」は Feldgewächse.
- (31) 現在の単位によれば1 フィートは約 30.48cm、4 平方フィートは一辺約 60cm の正方形の土地。
- (32) GK 177=548.
- (33) Heiland, 2002. op.cit.
- (34) 詳細は「連絡学校」『フレーベル全集』第五巻、玉川大学出版部、1981年
- (35) 「幼稚園の作業具についての全体にわたる書簡式の説明」『フレーベル全集』第五巻、282頁
- (36) 「講演—1839年1月7日、ドレスデンのツヴィンガー宮殿においてザクセンの国母陛下の御前にて—」『フレーベル全集第四巻』玉川大学出版部、1981年、469頁。